

せんぼく探訪 VOL.10

『仙北市角館町雲然のイタヤ細工製作技術』が秋田県文化財に指定される!!

1. 種 別 無形民俗文化財 (民俗技術)
2. 名 称 太平(秋田市)と角館(仙北市)のイタヤ細工製作技術
3. 所 在 地 仙北市角館町雲然地区
4. 主たる保護団体 角館イタヤ細工組合
5. 指 定 日 平成20年3月21日

本技術は、イタヤを材料として箕やカゴなどを作る技術で、秋田県で本市角館町雲然地区と秋田市太平黒沢地区で伝承されています。竹を用いた編み組細工は全国的にみられますが、イタヤを主な材料とするのは工芸の適した竹の少ない北東北だけであるようです。

イタヤ細工には、イタヤカエデ類(主にアカイタヤ)の他に藤づるや根曲竹(チシマザサ)、樺(ヤマザクラ類の樹皮)などが用いられます。材料のイタヤは、イタヤカエデを縦に8等分くらいに割り、中芯を取り除き巾を整え、年輪に沿って一枚ずつ帯状(※)に剥がしてから面取りをして仕上げます。雲然ではこの仕上げの作業に、明治25年ころに発明されたカッチャ小刀と呼ばれる左側に刃が付いた小刀を用いており、これによって作業能率が大幅に向上したといわれております。

本来は農家の手内職として作られていたイタヤ細工は、近代以降は需要の増加に伴って県内各地や青森、岩手、山形などで盛んに生産されました。角館雲然でも昭和30年代には約50戸がイタヤ細工を生産していたとされます。しかし、昭和40年代以降は農業の機械化や生活様式の変化によって、実用品としてのイタヤ細工の需要は激減し、近年は調度品や土産物の生産に比重が置かれています。

本製作技術は、かつて北東北の農業や生活文化の一端を支えた用具の製作技術であり、全国的にも珍しいイタヤカエデを用いた地方色豊かな民俗技術として貴重であります。

※帯状(イタヤ折板)

